



シーカー 5

α L P H α L I G H T

安部飛翔

Hisyou fbe



アルファイト文庫



ノブヨリ・シュテン

ノブツナの息子。
19歳。年若くして
国の政治全般を
取り仕切る「神童」。

ノブツナ・シュテン

ディラク島最大勢力の国主。
40歳。SS級相当探索者でも
あり、「鬼刃」の二つ名を持つ。

クランド

ディラク島にある小国の王。
35歳。天才的な素質を有し、
ある出会いを契機に急激な
成長を果たす。

謎の女占い師

突如クランドの前に現れ、
怪しげな力でクランド軍を
連戦連勝に導く。

主な登場人物

シズカ・シュテン

ノブツナの娘。18歳。
美しい姫でありながら小太刀
二刀流・方術を操る手練。

フルール

次元を越える能力を
持った時空竜。
異世界から来訪し、
スレイに懐いている。

スレイ

本編の主人公。18歳。
シークレットウェポンの
双刀を操る最強剣士。
二つ名は「黒刃」。

ディザスター

EX+級の力を誇る「欲望」の
邪神。蒼く滑らかな毛並みを
した狼の姿。

1

ディラク島——『ノブツナの城』ノブヨリの部屋

「……という訳で、我が軍は敗北し、青牢^{せいろう}の砦^{とりで}を克蘭ド軍に奪われるという無様な結果を晒^{さら}しました。この処罰^{ふせい}、何なりと」
まさに敗残の将といった風情^{ふうせい}のディラク人の男^{かふと}が兜^{かぶと}を脱ぎ、死をも覚悟した面持ち^{おもも}で頭^{こうべ}を垂^たれた。

男^{おとこ}が纏^{まと}っている武者鎧^{よろい}は、本来なら豪華^{ごうか}絢爛^{けんらん}だったろうに、今は敵の矢を無数に受け、見る影もない程ボロボロになっている。

彼自身の肉体も、かなりの傷を負っていた。

男よりも一段高い位置^{ざい}に座^まし、報告を受けているのは、ノブヨリ・シュテンだ。
年齢は十代後半、ディラク風の彫^はりの浅い顔立ちの美少年である。肌は青白く、狡猾^{こうかく}そうな

黒い瞳をしている。

細身で、筋肉はあまり付いていないようだ。身に纏ったデリラク風の装束は見るからに上等で、軽やかな着心地を窺わせる。

ノブヨリは男の報告にも顔色一つ変えることなく、悠然と言いつつ放った。

「報告を聞く限り、今回の敗北は必然の結果と言えるでしょう。それに、この程度の負けなら大局に影響しません。とはいえ、はじめはつねねばなりませんから、信賞必罰の原則に基づき、それなりの処罰を下します。が、そこまで畏まられても困ります。一先ず、謹慎でもしておいて下さい。追って、沙汰を伝えます」

「は？ ……はっ!!」

ノブヨリの口調があまりに軽々しかったので、男は一瞬呆気に取られた。しかしすぐ気を取り直したようで、立ち上がって深々と礼をし、部屋を辞した。

ノブヨリは手に持つ扇子を口元に当てたまま、考え事でもしているのか、しばらく黙り込んでいた。

そこへ、不躰ともいえる程唐突に女性が入ってきて、ノブヨリに声をかける。

「おや、珍しいですねノブヨリ。あなたがそれ程感情を乱すとは」

見た目が二十代のその女性は、サラサラとした美しい黒髪をポニーテールにしている。

くせのないストレートヘアで、結びを解けば足下まで届く長さがありそうだ。

目は大きく切れ長で、黒い瞳が煌いている。

身長は低く、たいそう小柄だったが、その細身の肢体はしなやかに鍛え上げられているようだ。

模様も色合いも美しい着物を纏っているが、戦闘の際に動きやすいよう改造されたものだと分かる。足袋を履き、城内だというのに、背に長大な薙刀を背負っている。

そのいづれもながらの物騒な出で立ちに、ノブヨリは頭が痛いといった表情で苦言を呈する。

「母上、仮にも城主の妻ともあろう者が、城内でそのような勇ましい出で立ちをなさるのは如何なものかと。それに、マナーをまるで無視したそのお振る舞い。鼎の軽重を問われかねません。お振る舞いに気をつけて下さいと、何度言えば分かっていただけののですか？」

息子ノブヨリの言葉を受け、母トモエはおもむろに背の薙刀を手取る。そして、柄で息子の頭を叩くという暴挙で以てそれに応えた。

「痛っ」

「全く、何時から私にそのような口を利ける程偉くなったのです。身の程をわきまえなさ

い。それで、結局何があったというのですか？」

母のあまりに無体な所行に、ノブヨリは僅かに涙目になりながら、渋々答える。

「いえ、少しばかり予定が狂っただけです。想定範囲内ではあるのですが、相手がクランド殿なので、少々やかいだなと思ひまして。彼と私の知略は同等のはず。なれば予定調和的に事が進み、計画に狂いが生じる訳などないと思つていたのですが……こうして実際に狂いが生じたとなると、クランド陣営に何やら変化があったということになります。

しかし、私は殆ど何も顔に出していなかったと思うのですが、母上はよく分かりましたね？」

「息子の些細な変化を見抜けずに何が母ですか。私を見くびるのも大概になさい」

思わず肩を竦めるノブヨリ。

神童ノブヨリをして、「母は偉大なり、とは至言だな」と感嘆せしめる女傑ぶりを示すトモエであつた。

ディラク島——『クランドの城』軍議の間

「という訳で、お前の言つたとおりに事が運び、青牢の砦は我が軍が奪取した。感謝しよう」

壇上に座する男が、一人の女に向けて、静かな声でそう言つた。

今、この場にいるのは二人だけである。

男は三十代半ばくらいだろうか、鋭い眼光を放つ美しい男である。

かなりの長身で、およそ極限まで絞上げられた肉体をしている。

纏つているのはごく一般的ディラク風の戦装束で、身に着けたもののうち唯一豪華なのは、腰に提げたヒイロカネ製のディラク刀の大太刀と、その長大な刃を納める鞘のみだつた。

このディラク刀は世にまたとない大業物である。切れ味の非常に優れた刀で、その刀身は凄絶な美しさ、柄や鐔にも華麗な意匠が施されていた。

しかし、家宝であるその刀の存在感をかすませる程に、男は威風堂々としている。質素な身なりながらも、王としての大器を感じさせた。

感謝すると言ひながらも、男の目に喜びは浮かんでいなかった。何事か冷静に思案しているような、感情の読み取れない透徹した瞳である。

対し、男より感謝を告げられた女は、腰を深く曲げて礼をした。

「お役に立てて光栄だ。それでどうだ、クラランド？ 私の予言は本物、それもかの^{ほし}星^{ほし}にも負けぬということが分かったと思うが、これで私を雇^やつてもらえるか？」

口調こそ男っぽいが、外見は妖艶な美女であった。

足下まで届く黒髪は、煌^{きらめ}くような光を宿し、艶^{つや}やかな黒い瞳が奥深い光を湛^{たた}えていた。

肌は白く、彫^はりの深い顔立ちだ。

女の身長は高く、胸も大きい。そんなスタイルの良い肢体^{しだい}を紫色の長衣に包み、口元を薄いヴェールで覆^{おお}い隠している。古い師風の神秘的な姿だった。

女でありながら男のように粗雑^{そざつ}な口を利くのも特徴的だ。

ディラク島の小国とはいえ、一応は一国の国主である男——クラランドの名を呼び捨てにし、対等な口調で話すのだから、本来ならば斬首^{ざんしゅ}されても不思議ではない。

だがクラランドは、そんな女をただ無関心そうな瞳で見返し、淡々^{たんたん}と告げた。

「まあ良からう、約束は約束だ。お前を雇うことにしよう。ただし、然程^{さほど}重要な役割は与えられん。せいぜい俺の傍^{そば}付きといったところだな」

「ほう、随分と用心深いことだな？」

クラランドの眉が僅かにピクリと動くも、泰然^{たいぜん}とした様子に変わりはなく、身体は微動^{びどう}だにしかかった。

女は内心舌を巻きつつ、考えを巡らせる。

クラランドが傍^{そば}付きに命じたのは、自分を信用していないからだろう。同時にそれは、クラランドがそれだけ自らの力に自信を持っているということも示す。

それとは別に、王としてのクラランドの言動は、いまひとつ不可解だと女は感じていた。

国軍が勝利を収め、青年の砦を手に入れたというのに、「一つ、予定外に使える物が増えたな」というような反応だったのだ。

戦に多大な貢献をした女の力——あらゆる戦局に於^おいて、完璧な策を提言した——に關しても、全く興味を示さない。

読めない。女の力を以^{もつ}てしても読めなかった。

クラランドは、魂の輝きがあまりにも強すぎる。当代の竜皇^{りゅうおう}ドラグゼスや魔王サイネリアなどと比べても、その輝きは圧倒的であった。

竜皇や魔王だけではない。

この世界に数える程しかないSS級相当探索者であっても、クラランドの魂の輝きに勝る者はいない。彼らは所詮^{しょせん}、その肉体が特別だというだけの存在なのだ。

魂の価値は、生まれた時には既に^{すで}、ほぼ決まっているとされる。

ならば、女の^め眼^めすら眩^{くら}ませる魂の輝きを持つこのクラランドは、余程^{よほど}特別な個体なの

だろう。しかもそれが、た・だ・の・人・間・だ・というのだから、世の中というものは全く以て理解し難い。

そう思いつつ、女は少しばかりクランドに揺さぶりを掛けてみることにした。

「それで、手に入れた青牢の砦の守りはどうした？ 敵がすぐに取り返しに来るかもしれないぞ」

「砦攻めで負傷した軍の傷病兵は既に帰還した。死んだ兵士の弔いも済んでいることだろう。戦列には新たな兵が補充され、防備態勢が固められているはずだ。何ら問題はない」

「はず？ お前は何も指示しないのか？」

「ああ、俺は常々兵士達にこう言っている、兵士一人一人が一軍の將たれ、とな。勿論、心構えの話だが。同時に、こうも言っている、將の命令に従って死ねと。將に対しては、王である俺の命令に従って死ねと。戦いの現場で自ら判断して動けない兵士など役に立たん。だが指揮系統を乱して勝手な動きをする兵士は害になる。故に、俺が將兵に求めている素質は、現場において自己判断で動きつつ、上からの命令で死ぬることだ。それができれば、民を守る刀たる資格はない。国主たる俺自身も含め、兵とは、民草の安らかな生活を守り抜く為に存在する刀なのだから」

女はクランドの主張を聞いて絶句する。

と同時に、王として民への想いを語った時、クランドの瞳に宿ったあまりにも大きな慈愛、我が子に対して抱くような無償の愛のようなものを見て取り、クランドという男をようやく理解できた気がした。

なるほど……やや理想に傾き過ぎてはいるがまさに大器。あのような魂を持つ訳だ、と女は納得する。

クランドはさらに続けた。

「青牢の砦は、お前のおかげで予定外に手に入ったおまけだ。取引材料として、あつて便利なのは確かだが、なくて困るものでもない。あの砦をノブヨリという鬼才から守り切れるかどうかで、砦攻めをした我が軍——今は砦の駐留軍だな、その將の器を測る。相手が神童ノブヨリといえども、砦戦は守る側が有利であることに変わりない。こちらの補給線も万全だからな。上手くいけば、戦いに勝ったうえで、民を守る為の良き刀たる優れた將を見出せる。そうならなかったとしても、元々なかった物を失うだけだ」

「その戦いで失われるであろう兵力や、命はどうなのだ？」

「兵の命は民の為にあると言っているだろう。それを捨てられぬ者は兵ではない。それに、兵の数ならば問題ない。何故か、この国には志願兵がやたらと多いのだ。正直、この小

国には過ぎる兵力だ。まあ、戦えぬ民を守ろうというその気概は頼もしくも好ましくも思うが……それでもやはり、民の為に死んでもらうことには変わりない。俺は鬼なのだな」あくまでも淡々と告げるクランド。

しかし女は、クランドの言葉の裏にある思いを読み取っていた。

このクランドという男は、民のみならず兵に対しても愛情を持っており、その背に負ったものの大きさと、苛酷さは尋常ではない。

そして、志願兵が多い真の理由も、クランド自身にあるのだろう。

人間というものを少し舐めていたか、と女は、僅かばかり背筋に悪寒が走るのを感じる。「それで女。お前の名は何と言う」

「名はない。ただ占い師とでも呼べばいい」

クランドの眉が再びピクリとするが、やはりそれだけだった。

「分かった。それでは占い師、城を案内してやるから、ついて来い」

「国主自らご案内か？ 随分とまた暇なのだな」

「国主の役割は決断することだ。他にも付随して色々とあるが、幸い今は時間がある。何より、お前は俺の傍に付けるのだから、覚えておいてもらわねばならぬことも多い」

そう言って立ち上がるクランドを見ながら、女は思う。

何だかんだと言っているが、要は、自分を野放しにしない為に自ら城内を案内するということ訳か、と。

なんにせよ、このクランドという男、使える。

面白いことになりそうだと女は感じていた。

こうして、ディラク島に波乱を呼ぶ種が蒔かれたのだった。

2

クロスメリア王国——円卓の広間

スレイとジャガーノートの邂逅から、大分時間が経った。

ジャガーノートの「命令」からようやく解放され、自由を取り戻した一同——邪神対策会議の参加者——は、時空竜フルールの力によって、ヴェスタ世界のクロスメリア王国王城、円卓の広間へと帰還を果たしていた。

それは、彼らが世界の墓場に転移したのとはば変わらぬ時系列であって、広間に残って

いた者からすれば、束の間の出来事だった。

突然消えたと思われた各国の首脳陣が、一瞬にしてまた現れ、しかも様子が一変していることに、広間にいた侍女達は心底驚く。

各国の首脳陣は、誰もが一樣に、疲れ果てているようだった。

その空気をまるで読まない明るい声で、フルールがスレイに語りかけた。

「いやあ、先刻も思ったことだけど、スレイがいると、この世界ヴェスタへの出入りに力を浪費せずに済むから楽でいいね」

「気を付けるのだな、フルール。抑制され失っていた力をお前が取り戻していること、そしてお前が下級邪神に匹敵する存在であるということに、我と主は既に気付いている。即ち、もはや他の邪神もお前の真の力に気付いているだろう」

お気楽そのもののフルールに、欲望の邪神ディザスターが忠告する。

「分かってるよ。だけど、そもそも注意しようがないだろう？ 取り戻してしまった力はどうしようもないし。それに、今のスレイだったら大抵のことは心配ないんじゃない？」

「……ああ、確かに、主の成長は著しい。お前が世界の墓場へ戦場を移してくれたことに感謝しよう。あの場にあり続けたおかげで、主を縛っていた枷は全て外れた。だがまだだ。まだピースが幾つか不足している」

「ディザスター、君、何を考えているの？」

『主の欲望を真に叶えること、唯一それが我が望みだ』

自らに関するベツト達の会話を聞きながら、スレイは良く寝たと言わんばかりに、呑気に欠伸をしている。

それを見たフルールが、再びスレイに問いかけた。

「ねーねースレイさあー、あの世界での戦いというか、小細工満載の戦いを見た上で、今のスレイだったら、僕を見て何か感じる必要があるんじゃないの？」

「ふん？ お前だったら、それこそこの場にいる全員を邪神と戦える速度域まで誘えるとか、それと同様の効果がある加速薬のような物を創れるということか？ 気付いてはいるが興味はないし、そんなことをしようとしたら寧ろ邪魔するぞ、俺は」

フルールの質問にあっさりと答えてみせたスレイ。フルールはじと目になる。

「……やっぱりそれって」

「当然、邪神は全部俺の獲物だからな。まあ一柱ぐらいなら、お前とディザスターに譲ってやってもいいが。その場合、二人で仲良く半分こしてくれ」

「スレイってほんと……」

もはや呆れるしかないフルールだった。

ちなみに、これらの会話は特殊な発声法でなされていた為、周囲の誰にも聞かれることはなかった。

さて、とスレイは首を巡らせる。

格好付けて消えた手前不意だが、戻ってきた以上、せねばならぬことがあった。

会議の隙にスレイが口説き落とした侍女エリシアは、一同が消えた時、他の侍女達と共に広間を片付けようとしていた。

そこへ突然スレイ達が戻って来たので、彼女もまた、驚いて呆然としている。

そんなエリシアに、さつと近付いたスレイが声をかけた。

「すまん。先程あのようなことを言って別れたばかりだが、また世話になるようだ」

「え？ ……は、はい!!」

エリシアは暫し答えに窮していたが、すぐに明るい顔となり嬉しそうに頷いた。そして、クロスメリア国王アルスに呼ばれ、その下へと歩いて行く。

恐らくは、会議再開の為に準備するよう指示を出されるのだろう。スレイは、また無駄な話し合いが始まるのかとうんざりしていた。

エリシアは侍女の中でも、それなりの立場にあると思われる。何せもともとこの会議の

諸事を一任されていたくらいだ。

スレイが周囲を見渡してみると、他の侍女達は未だどこか浮き足立ち、同時に、緊張しているようでもあった。

無理もない。

この場に集まった者達は、皆錚々たる顔ぶれだ。その姿絵や噂話などに、侍女達もこれまで色々と触れる機会があったはずだ。

だが、仮にも王城の侍女たる者が、いかにも興味津々といった顔で賓客を盗み見るのは如何なものか、とスレイは思う。

結局、会議の参加者の全員が元いた席に着く前に、戻って来たエリシアの一喝によって侍女達は姿勢を正されることになった。

会議に必要な準備を手早く終えた彼女らは、追い払われるようにエリシアを残して退室していく。

まさにスレイが予想した通りの運びとなった。

スレイは今回も、一人優雅にティータイムと洒落込むことにした。熱いお茶を冷ましつづ……別に冷ます必要などないのだが、そこは雰囲気というものだ。

フルールはスレイの右肩の上、ディザスターは足下と、いつもの定位置にいる。

そうやって、スレイはひとり悠然と寛いでいたが、他の者達は重苦しい雰囲気包まれて黙り込んでいた。

当然である。

ジャガーノート——上級邪神の名を冠する彼女が現れた時点で、スレイとそのペット達を除いて、皆が全てを失い地に伏したのだ。

ジャガーノートが下した命令の効力が薄れるまで、誰もがそのままで在り続けた。意味不明にも程があるだろう。

地に伏している間、彼らには何もなかった。

ジャガーノートという存在がいきなり現れたかと思うと、同時に、彼らは意識する間もなく地面に這い蹲っていた。やがて起き上がってみると、現れた筈のジャガーノートはもうそこに居なかった。そんな状況なのである。

それでもただ一つ、自分達が如何に無力かということだけは分かった。

「ディザスター殿」

「なんだ？ 小娘」

吸血姫シャルロットの問いかけに、ディザスターが応じた。

スレイは「おや？」と思う。他の者達も疑問の表情を浮かべている。

ディザスターがシャルロットを小娘呼ばわりしたことに、皆どこか違和感を覚えたのだ。何しろ、シャルロットは齡五千歳を超えていると聞いている。

だがまあ、俺が気にすることでもないだろうと、スレイはすぐに疑問を放り出した。

そもそもスレイは今、気怠かったのだ。いや、これは正確な表現ではない。

世界の墓場へ行く前に比べたら、身体は軽い。スレイの魂に枷をかけていた闇神アライナの束縛から、完全に自由になっている。

それでもなお、世界の墓場にいた時と比較して、ヴェスタ内ではかなりの重圧が掛かっていた。

使える力は、比較して一パーセントにも満たないのではないだろうか？

殊にこの世界は、スレイにのみ、他の者より遥かに大きな制限を掛けるのだ。

何にせよ、あれ程の解放感を知ってしまった今、この世界が閉塞感に充ち満ちて感じられて仕方がない。

なのでスレイは、極端に気力が低下していた。耳に入る会話もただ聞き流すだけだ。

「あの者が上級邪神だというのは相違なからうかの？ 確かに彼奴めが、求道のジャガーノートなのなの？」

『そうだ』

シャルロットとディザスターの会話に、場はざわめいた。

全く元気なことだ、と呆れるスレイ。

尤も、この世界に戻ってきてからも、戦いと女に関する話題ではきわめて雄弁だったスレイである。

もしスレイが呆れているなどと知れば、他の面々は、そんな奴に呆れ顔をされるのは心外だ、と憤るであろう。

「……あれが、上級邪神か」

誰かがぼつりと呟いた。

それを無視して、シャルロット達の会話は続く。

「それでです、じゃ。結局、あの場で何が起きたのかの?」

『お前達はジャガーノートの命令に縛られ、その効力が切れるまで地に伏し続けた。ただそれだけのことだ』

場は沈黙に包まれた。

皆、ある程度の覚悟はしていた。それでも、自分達が邪神という敵の前であまりに無力であるという現実を突きつけられれば、シヨックを受けざるを得ない。

だがシャルロットは平然と続けた。

「では、何故妾達は無事なのでありましょうかのう?」

『それは……』

ディザスターは答えをやや躊躇うように、スレイを見上げた。

スレイに関わる話だ。スレイの判断を仰ぎたい、と思ったのだろう。

スレイ程極端ではないとはいえ、ディザスターもまた、この世界から重圧を受ける身であることは同じ。

スレイ自身の成長も合わせ、今ではその考えを読めなくなっていたので、本人に直接判断を示してもらう他ない。

対し、スレイの答えは簡潔だった。

「まあ、あんたらが無事でいられたのは、ジャガーノートが俺にビビって逃げ出したからだな」

それを聞いた皆の反応は様々だったが、どちらかと言えば、スレイが語った内容に疑いを抱く者が多いようだ。

何はともあれ、場は騒々しくなった。

しかし、スレイが言いたいことは多くない。

騒ぐな、あまりにも煩い、鬱陶しいにも程がある、それだけだ。

そんな中、一人落ち着いているシャルロットが、相変わらず良く通る声でディザスターに尋ねた。

「スレイ殿の言ったことは、本当でありましょうかのう？」

『いや、それは……ジャガーノートは決して恐れて逃げ出した訳ではないが、主とやりとりした結果、一時的に引いた、というのは事実だな』

何故わざわざディザスターに聞くのだ、とスレイはシャルロットを不満げに見つめた。

そして、自分の言葉を否定したディザスターも睨む。

ディザスターの答えを聞いた者達の中から、スレイを糾弾するような声も一部で上がっているが、スレイは無視するのみだ。

飄々とお茶を飲むスレイを見ながら、シャルロットが告げる。

「では、少なくともスレイ殿がかの邪神の命令を撥ね除け、対等に話し合ってみせたことは確かなのじゃな？」

『ああ、確かだ。間違いない』

このやりとりに、周囲はまた沈黙した。

スレイを非難していた者達も、その事実を知れば、ただ愕然とするしかない。

一方のスレイは、先程から騒いだり黙ったり、どっちにしろ鬱陶しい連中だ、と感じ、

溜息を吐いた。

だが面倒臭いことに、シャルロットが今度はスレイに尋ねてくる。

「スレイ殿、お主は上級邪神より強いと考えて良いのかのう？」

あまりに露骨な質問に、皆の表情が一変する。

スレイはひたすら億劫そうに口を開いた。

「戦えば俺が勝つ。だが強いかといえば、ノーだ。あの場に現れたのは、ジャガーノートの念体だ。本体の一割程度の力しかない。それでも俺と互角だった。そう考えると、本体ならば俺より圧倒的に上だろう」

それに俺の方が、世界の重圧をたっぷり受けているしな、と皮肉っぽく笑うスレイ。

広間に絶望的な空気が満ちる。

スレイを責めていた者達とて、スレイが本当にジャガーノートに匹敵するなら、邪神との戦いの切り札になると期待していたのだ。

しかし、そのスレイは敵の本体に遠く及ばないという。

他の者では、分体相手でさえどうしようもなかったのだから、今のスレイの話を聞いて、皆が絶望の色を濃くするのも仕方ない。

俺は、戦えば勝つ、と言ってるんだがな。とスレイは思いつつも、まあこいつらにそれ

を言っても無駄か、と肩を竦めた。

そして、分かりやすい意見をしてやることにした。

「何を葬式みたいな雰囲気染まってるのか知らんが、俺の話をちゃんと聞いたか？俺はあれを念体と言ったぞ。つまり、本体はまだ復活していないということだ」

誰もが再び希望を見出したかのように顔を上げた。

「つまりだ、封印の強化とやらをすれば、念体も出てこれなくなって万々歳じゃないのか……？ まあ、あいつは俺の女にするんだから、封印の強化なんてさせないけどな」

今のスレイの言葉の後半部分は、特殊な発声法により発せられた為、周囲には届いていない。

前半だけを聞いた皆の顔には、多少明るさが戻った。

しかし今度は、別の者から疑問の声が上がる。

「ですが、その念体にさえ私達は全く抵抗できませんでした。封印の強化をしたくても、ジャガーノートの念体に邪魔されてしまえば、どうしようもないのではないのですか？」

悲観的な内容の割には、静かで力強い声だった。

スレイが相手を見ると、そこにいるのは聖王イリユアである。

そういえば、こいつは最初から特に騒ぎもせず、俺の方ばかり見ていたな、と考えるス

レイ。

『星詠』と呼ばれるマリリーニアでさえ、俺の言葉の真偽が分からずあたふたしていたんだが……まあ、あいつに『視』える領域じゃないから、慌てるのも当然か。

対するイリユアは、他の連中のように騒ぎもせず、スレイだけを見ている。やはり本気で何か秘密がありそうだ。

この時スレイは、度重なる面倒臭い事態に、心の中で呟く口調まで乱暴になっていた。

普段なら、美少女相手に『こいつ』などと乱暴な言葉遣いはしないのである。

それだけ面倒臭いと感じているのかと自覚しつつも、仕方なく答えを返す。

「まあ、問題ないだろ。アルスとの戦いでも言った筈だが、奴らの力は、この世界では制限される。ジャガーノートの力があそこまで圧倒的だったのは、世界の墓場——つまり、この世界の外に居たからだ。だから、この世界でならある程度は戦えるさ……あくまで、ある程度でしかないし、何より一番力を制限されてるのは俺自身だな」

ちなみにスレイは、今度もまた台詞の後半部分を誰にも聞かせていない。

それにしても、気絶する前に聞いたはずの、ジャガーノートの『ご主人様候補』や『天才』発言をこいつらが忘れてくれていて良かった、とスレイは思う。

その後の展開があまりにも衝撃的で、記憶に残らなかったのだろうか。

突然現れたジャガーノートの第一声であつたし、その後はいきなり「命令」を喰らわされたのだから、皆忘れてしまふのも仕方ないのかもしれない。

ここまで考えたスレイは、もう必要な情報は全て提供し、務めを果たしたという気分になった。

周囲など気にせず身体を伸ばし、卓に突つ伏してだらけるスレイ。

そんな中、聖王イリュアだけは、依然真剣な表情でスレイを見詰めていた。

その後に協議された議題は、結局のところ、スレイにとって大した内容ではなかった。最初の会議で決められたこと——つまりは封印の地を探索し、戦力増強を図り、アイテムを収集し……そういった計画を早期に行うと確認するに止まった。

新たに議決されたのは、探索者ギルド本部にある「転移の間」——飛翼の首飾りを使って念じれば、誰でもマージングなしに帰還できる場所——の使用許可くらいだ。

普段はギルドによって使用が制限されているが、難易度の高い迷宮探索が必要となるのだから、これくらいは当然の決定だろう。

それから、会議の参加者達はさらに数日ここに留まり、話し合いを続けることも決まった。

これ以上話し合つて何になるのかとも思うが、まあお偉い方々というのは、会議がお好きなのだろう。

スレイは偏見に基づいて、勝手にそう決めつける。

スレイ自身は、もう会議に参加するつもりはない。

ゲッシュには参加してくれと散々懇願されたが、まったく取り合わなかった。

妥協案としてゲッシュから提示されたのは、スレイの代わりにディザスターとフルールを参加させるという案だった。

それはあつさり認めるスレイ。

結果として、二匹からはやや恨みがましい目を向けられてしまった。

何にせよ、だ。スレイにはそんなことよりも重要な、為すべき事柄があつたのだ。

広間を出たスレイは、王城内を熟知しているかのように自由自在に闊歩し、面倒臭そうな相手はことごとく避けるという離れ業を駆使して、目標に最短距離で向かった。

スレイは客人であるから、本来なら王城を自由に歩き回つていい訳がない。しかし、そんなものはスレイの知つたことではなかった。

ようやく目的の相手を見つけたスレイは、すかさず声をかける。

「エリシア」

「え？ あ、スレイ様！」

一瞬驚くも、明るい笑顔を見せるエリシア。

どうやらどこかに向かう途中だったらしい。

特に今、何か仕事をしている様子は見受けられなかった。

「これから何か用事か？ 忙しいなら後で出直すが」

「あ、いえ。確かにこれから雑務はありますが、それ程急ぎの用ではないので、構いませんよ。でも、出直すって、まるで私が何処にいても見つけ出せるみたいな言い方ですね」

「当然だろう。愛しい女の居場所くらい、必ず探し出してみせるさ。俺の想いを以てすれば、不可能じゃない」

「え？ あ？ もう、スレイ様ったら、本当に。くすくすくす……」

どうやら単にいつもの口説き文句と思われたようだ。

嘘ではないのだがな、とスレイは思う。

厳密には、愛しい女だけでなく、相手が誰であつても見つけられるのだが、その点は敢えて伏せておいた。

まあ、勘違いにせよ、彼女に面白がつてもらえたのならば問題ない。

それにしても、と思う。

円卓の間で初めてエリシアを見た時は、生真面目な表情のお堅い美女だと思つたのだが、随分と明るく豊かな表情を見せてくれるようになったものだ。

これもまあ、自分の徹底的なアプローチがあつてのことだろう。

あの短い会議の間、言葉だけじゃなく、タイミングを計つたことも功を奏した。

エリシアの性格、氣息、思考の間隙についても徹底的な分析を重ね、そこから導き出した最適の戦術を以て口説いたのだ。

最高に密度の濃いアピールができたはず、とスレイは自負している。

そうした戦術は、戦いに通じるレベルですらあつた。

結果として、これだけの美女が自分に微笑んでくれているのだから、努力して口説いた甲斐はあつたのだ。

ニヤリとしたスレイは、エリシアの耳元に口を寄せてこう告げた。

「なあ、今晚エリシアの部屋に行きたいんだが。使用人達が居住している区画と、その中のどこにエリシアの部屋があるか、教えてくれないか？」

「え？ あ。そ、そんな。まだ今日会つたばかりなのに、いきなり……」

「だめか？ だが俺はエリシアの全てが知りたい」

「で、でも、私、仕事ばかりで、男の人のことなんて全く知らなくて……」

まるで幼い少女のようににはかむエリシアに、スレイは思わず柔らかな笑みを浮かべる。実に可愛らしいと思う。

「それは嬉しいな。俺はエリシアの初めての男になれるんだったら、死んでもいい……駄目か?」

「わ……分かりました。私の部屋は……」

スレイはエリシアの個室の在処^{ありか}を聞きだすことに成功した。呆れてしまうが、本当にこの短期間でそういう関係になることを了承させてしまったのだ。

ちなみに、初めての男になれるなら死んでもいいと言ったのは、嘘ではない。

スレイの場合、本気で自分の女一人一人に命を懸ける^か気だった。もちろん、いったいどれだけ命を懸ける羽目になるのかなど想像もしていない。

そのままスレイとエリシアは、暫し^{しば}談笑の時を楽しんだ。その姿はどこから見ても、仲の良い恋人同士に見える。

そんな時だった。

「貴様っ!!　そこで何をしている!?!」

二人に、いや正確にはスレイに向け、怒鳴り声が発せられた。

「あら?　ザイン?」

声の主の方を向いたエリシアが応じる。

ザインと呼ばれたその男は、王城内でよく見かける一般兵の格好をしていた。

兵士がこんなところで何をしているのだろうか。

スレイはその男、ザインの接近に気付いていたのだが、そもそも興味がないので放置していた。

興味なさそうなスレイに、ザインが再度声^あを荒らげた。

「貴様っ、見かけぬ顔だな!　いったい何者だ!?!　この王城内で何をしている!?!　答えろ!!」

慌てたエリシアが、スレイに代わって答える。

「ザ、ザインっ!!　貴方、早く謝りなさい!!　この方は探索者ギルドの代表者としてやってこられた、ギルドマスター・ゲツシユ様のお付きのS級相当探索者よっ!!　国王陛下の大事な客人に対して一兵士風情がその態度、許されると思っているのっ!?!」

「え、え?」

エリシアに怒鳴り返されたザインは一瞬^あ啞然とし、慌てふためいて頭を下げた。

「こ、これは大変失礼しました!!　王城内で見かけぬ顔を見たので思わず……誠に申し

訳ございません」

「いや、別に構わないが」

「よかったわねザイン、スレイ様が寛大な方で」

どうしても良さそうに告げるスレイの横で、ほっとして微笑むエリシア。

実際のところ、スレイは決して寛大な訳ではなく、本気で関心がないだけであつた。

しかし、こんな出来事すらも、エリシアのスレイに対する好意を高めるのに一役買ったらしい。

ただスレイは、先程、ザインという兵士が自分に憎しみに近い視線を向けてきていることに気付いていた。

「しかし、スレイ様。老婆心ながら申し上げますと、お客人といえども、王城内のこのような奥を歩き回り、侍女と個人的にお話をされるのは如何なものかと？ 私のご案内致しますので、客室……いえ、この場合は貴賓室でしうか、そちらに戻っていただけますか？」

「ザイン、貴方何言つてるの？」

「エリシア殿、貴女こそいったいどうなされたのですか？ 王城の侍女たる者が、客人相手にこのような場所で談笑するなど」

「そ、それは……」

「さあ、スレイ様。おいで頂けますか？」

状況からいって、このザインという男の言い分に分がある。

エリシアはザインの強引な態度に困惑するも、やはり後ろ暗いところがあるせいか、何も言い返せないようだ。

ここでスレイは、ザインの言動からその本心を見抜いた。

どうやらこの男、エリシアに片思いをしているらしい。

一方のエリシアは、この男を何とも思っていない。それはエリシアの様子からはつきりと窺える。

スレイにとってみれば、既にエリシアの部屋を聞き出しているし、彼女に懸想する男がいたとて、特に問題はない。

それはさておき、ザインが言及した、ここが王城でもかなり奥に位置するという話には引っかけがあつた。

それを言うなら、こんな場所に一兵士が居る筈はないのだ。警備兵だというなら話は分かるが……とスレイは訝しむ。

スレイは城内の兵士の配置状況は把握しているし、ザインの着ている制服は警備兵のもの

のではない。

つまり、ザインはエリシアと話す機会を窺って、刃りをうろついていた。そして、エリシアと談笑しているスレイを見つけ、邪魔をしたという訳だ。

スレイはふと、生まれ故郷のトレス村での出来事を思い出し、怒りを覚えた。

当然、自己の感情を完全制御できるスレイなので、意思の支配下にある怒りだったことは言うまでもない。

あの時、村で、幼馴染であるスレイとフィノ達の仲を嫉妬した馬鹿共の行動が、目の前のザインに重なる。

この男は、エリシアを勝手に自分の女だと思い込み、ちよつかいを出してきているのだ。邪魔したいのなら、まずは俺のように努力し、相手を惚れさせてみる、とスレイは思う。それができない者には、何の資格もないのだ。惚れた側は、あくまで選んで貰う立場に過ぎない。

選ばれる為に、惚れて貰う為に頑張るのはいいが、相手の恋路を邪魔するような、間違ったやり方は許されない。

このザインはあくまで、エリシアに片思いしているだけの立場である。

明らかにエリシア自身が楽しそうにしているにも拘わらず、それを邪魔するという間

違った方法で、彼女を自らの物にしようとしている訳だ。

そんな屑野郎には、身の程というものを思い知らせてやっても問題ないだろう。

自分の女を狙う男相手に、わざわざ正しい努力の仕方を教えてやる程、スレイは優しい人間ではない。

スレイはニヤリとあくどい笑みを浮かべ、まずはエリシアの肩を抱くのだった。

ディラク島——『克蘭ドの城』鍛錬場

夜中である。

かなり広い鍛錬場で、克蘭ドは一人刀を振るい、汗を流していた。

その傍では、古い師の女が静かに克蘭ドの様子を観察している。

女は心中で思わず「これはっ!？」と叫び声を上げた。

女は、克蘭ド以上に速さを極めた刀術の使い手を知っていた。また、力を極めた刀術の使い手、技を極めた刀術の使い手も知っていた。さらには、それら全てを極めた者も知っていた。

そもそも女は、人間とは別次元の戦闘術を見てきたのだ。
そういった超一流の強者達と比べれば、克蘭ドはただ凡庸な人間に過ぎない。
克蘭ドの剣は所詮^{しょせん}、人間の領域に留まり、肉体的にも、あらゆる面で探索者には及んでいなかった。

だがそれでも、女は今、克蘭ドの剣舞^{けんぶ}を美しいと感じていた。かつて見たどんな刀術よりも見事だった。

克蘭ドの動きには、無駄が一切ない。それぞれに意味があり、その全てが次の動作、次の次の動作に通じている。

どこまでも続く刀の舞踏^{ぶたう}。

極まっている、という表現が相応しい。己がポテンシャルの全てを限界まで駆使し、極めた型だと言える。

だというのに、それは今なお成長し続けているようだ。

女がこれまでに見てきた刀術の技の全てが、真の意味で『技』というには、本質の部分であまりに粗雑^{そざう}な物だったと理解させられた。

克蘭ドの剣術はそれらとは何かが違うのだ。

技とは弱者が強者に勝つ為^{ため}の工夫であると言えるが、女はそうした小細工にこれまで嫌



悪感を抱いていた。弱者如きが工夫などして、いったい何の意味がある？ 所詮はただの悪あがきだ、と。

だが克蘭ドの鍛錬を、視て、弱者の工夫がここまで芸術に近い美しさに昇華されることもあるのだと、女は初めて知った。

「克蘭ド様は、刀術に於いて、才能だけなら、鬼刃ノブツナや刀神クロウなんて目じゃない。本物の天才だ」

そう城下で噂されていることは知っていたが、女は、これまで下らないと一笑に付してきた。

だが今は、自分の考えが間違っていたと認めざるを得ない。

もしこの男が探索者としてノブツナ達と同じステージに立ったならば、彼らなど相手にならないだろう。

女は再び、じつと克蘭ドを見詰めた。

克蘭ドは汗を飛び散らせ、息を乱しながらも、一分の妥協も許さず刀を振るい続ける。日中は国主として国務に就き、夜中のみ、それらから解放された一人の剣士として、己が身を鍛えているのだ。

「克蘭ド、お前は、探索者になりたいと思ったことはないのか？ なれないことに不満

を感じたことはないのか？」

思わず、そんな言葉が女占い師の口を突いて出た。

「何を言っている？」

刀を止め、女の方を向いた克蘭ドは、眉を顰めてただ訝しげに問うた。

「だから、そのように脆弱な身で刀を振るうのではなく、探索者となり肉体を改造し、もっと強い剣士になりたい、その力でこの国を大きくしたいと思ったことはないのか、と聞いている」

「……ふっ、くくっ」

克蘭ドは一瞬キョトンとした後、思わずといった感じで笑いを溢した。

「何がおかしい？」

「いや何、色々とな」

言葉を濁す克蘭ドだったが、思い直したように話を続けた。

「まあいい、戯れだ、答えてやろう。俺は国主だ。民を守り、安穏な生活に安んじるよう取りはからうことこそ己が役目。それ以外は些事に過ぎん。あり得ないことなど考えて時間を無駄にするよりも、今手札としてあるものを使い切って最善を尽くすだけだ」

「……」